



くらもと・そう / 脚本家・演出家。2005年より閉鎖となった北海道富良野市内のゴルフコースを舞台に「C.C.C富良野自然塾」を開塾。ゴルフコースの自然返還活動と、環境教育プログラムを展開している。

# 地球に暮らす① 自然と住まう

ドラマや舞台を通じて、自然の力強い営みや大切さを伝えてきた倉本聰氏。氏が塾長を務める「C.C.C富良野自然塾」での活動内容(環境教育)を絡めながら、自然との共存や地球環境について話を伺います。

## 奇跡の星に住むということ

私たちが暮らしている地球は、素晴らしい偶然から生まれた「奇跡の星」です。なぜ「奇跡」かという点、太陽と地球の程よい距離、そして地球の適切な大きさが偶然重なったことで、人間が暮らせる環境が生まれたからです。太陽と地球が今よりも少し離れると地球は冷えてしまったり、近づくと暑くて暮らせないでしょう。地球がもっと大きければ引力も強くなるから、隕石やら色々なものを吸引してしまう。逆に小さければ、引力が弱すぎて水も空気も抱えていられないのです。この絶妙なバランスで成り立っている星に、神のプログラムの偉大さを感じ

ずいられません。「奇跡の星」は、誕生してから46億年の時を重ねてきました。私は、その歴史を「地球の道」という4600mの道にあらわしてみました。1000万年を1mに置き換えたわけです。真っ赤なマグマの海に包まれたマグマオーシヤンの時代に始まり、幾度かの高熱や凍結を経て、また、様々な生命が生まれては絶滅しながら、道は進んでいきます。その長い歴史のなか、私たちの祖先にあたるホモ・サピエンスが誕生したのが、約20万年前。随分昔のように感じますが、地球の歴史のなかで見れば、ほんの最近。4600mの道上で



C.C.C富良野自然塾のフィールド入り口に構える「石の地球」。地球を知るためにはまず地球の仕組みを知ろう、という目的で生まれたもので、内核から薄い外殻までが細かくあらわされている



C.C.C富良野自然塾のフィールドより 右/「C.C.C富良野自然塾」のフィールド 中・左/460mの道に46億年の地球の歴史を綴った「46億年地球の道」。「マグマオーシヤンの時代」「全球凍結」「石油形成」等、歩み進めながら地球の変化を見られる

は、わずか2cm程度です。地球環境を著しく変えるきっかけとなった産業革命以後は、0.02mm程度。いかに短い間に人間が地球環境を駄目にしてしまったかを痛感しますね。

地球は、自分たちが生きていく間に存在すればいいものではなく、子孫に残していくもの。インディアンは古来から「自然は子孫から借りているもの」と言っていて暮らしを営んできました。その教えを親から子へ、子から孫へと伝えながら……。私たちもそうして自然を受け継いでいくべきですが、未来のことまで考えて行動できる人が、なかなかいないですね。地球環境の大切さも伝えられていない。年々子どもと自然の関わりが薄くなってきていることから、それが見てとれます。地球

を子孫に残していくには、未来を讀んで行動を計算していくことが必要でしょう。

「地球環境」とひと口に言っても、漠然としたイメージしかない人も多いと思います。都会に暮らしていれば、なおさらです。でも、身近なところから地球環境を認識することができるといいでしょう。例えば、息をとめてみると自分たちには酸素が必要だったことを思い出さずして、その酸素はどこから来ますか？ 光合成で酸素を生み出す葉っぱからです。また、水なしで暮らせるかという点、1日ないだけでもかなり苦痛ですね。その水はどこから来ているのか？ 東京都の水道なら7割位の水が利根川から来ているのですが、その水源は水上や谷川岳あた

りでしょう。そこでは、雨が降った時に森の葉っぱが雨の滴をゆっくり地面に垂らすことで、地中に水を蓄積させている。葉っぱがなければ、雨は直接地面に落ちて、さっと山を流れていくばかりですから……。空気と水だけをとつても、私たちが地球に生かされていることがわかりますね。

日頃当たり前のようにあるものが「ない」時の不快感に気づくこと、そして、その源を辿ってみるだけでも、地球環境の大切さを意識することができるといえる。空気や水に限らず、身のまわりには、なかつたら不快なものがたくさんあるはず。それを認識することが、現代人が奇跡の星を未来へ残していくための第一歩ではないでしょうか。(談)